

## フランス語

——フランス語の旧師たち——

高橋 安光

フランス語教科書としてはもっとも初期のものである『仏語啓蒙』（明治一五年）の著者今村有隣が明治二二  
年に東京高商初代のフランス語教授となった。明治三〇年頃からジャクレ、トロンコワ、ファーデル、ルーセ  
レらフランス人教師があいついで来日して教壇に立ち、最後にモリス・プリュニエが第二次大戦末に亡くなる  
まで二〇年間も教鞭をとったのである。また明治三八年からは日本印象派の巨匠久米桂一郎が専任教授となり、  
彼の親友黒田清輝も美校とかけもちでフランス語の講師となったのは、本学の文化的伝統のひろさを示すもので  
あろう。黒田が描いた矢野二郎校長の肖像画はその凜然たる心組みを伝えて見事であり、現在は学長室に保管さ  
れている。

本学創建時にはベルギーのアントワープ商業高等学校から何人の教授が招聘されてきたので、いきおいベル  
ギーやフランスに留学する者も少なくなく、フランス語専攻でなくとも間接的にフランス語教育に寄与した教授  
もいたのである。しかし私には自分が直接係わりをもっていたフランス語教官についてしか語る事ができな

い。それも私なりの偏見である以上でできるだけ手短かに述べるべきであろう。

昭和二四年八月三十一日付で東京商科大学専門部助教として新任してきた私は、山田九朗先生に連れられて世田谷の内藤濯先生のお宅に参上した。粹な和服姿の大柄な先生にはじめてお目にかかった時は少々こわい感じがあったのは当然で、先生はずでに停年退職し、私にとっては祖父のごとき存在だったからである。話の半ばで先生は机上にあった鈴を振って誰に向かってともなく「この音色をフランス語で表現すると、どう言ったらよいのかね」と仰言ったが、後から考えると、あれは私にたいするテストではなかったかと思っている。もちろん私に答えられるはずもなかった。ただその時先生が何とかつぶやかれたフランス語の発音の美しさに度胆をぬかれたことをいまでも忘れることはできない。

古い言い方をすれば、私の直接の上司は山田九朗先生であった。先生は高松中学から三高を経て東大仏文科に学び、立教大学教授となり、昭和八年以来本学予科教授となったのである。そして日支事変から太平洋戦争にかけて予備役からいくたびか応召して中国大陸に転戦したことは先生の徹底した人生観にふかく係わりをもったはずである。御専門のフロベールの『三つの物語』からヴァレリーの『レオナルド・ダヴィンチの方法』にいたるまでの鏤骨の名訳は私などの遠く及ぶところではない。その昔私は先生に、「エクレルシール」と「エクレーレ」といういづれも「啓蒙する、開明する」といった意味に解される類似した二つのフランス語の区別について尋ねた時、先生はちょっと考えてから、「木の葉が自然に枯れ落ちて明るくなるのと、木の葉がなにか非自然な力で葉を落されて明るくなるのと違いではないですか」と答えられたのには、正直に言って私は先生の語学的センスの繊細さに一瞬ジェラシーさえ感じたのである。先生はよく初級の試験に一〇〇個の単語の和訳あるいは発音記

号を要求したそうであるが、生半可な文法の知識を会得するよりは効果的な教育方法といえるであろう。いまも私は時々それを真似ることがある。

もうひとり語っておかねばならないのが根岸国孝教授である。先生は旧制浦和高校で私の大先輩にあたり、東大仏文科を出てから本学に再入学した文学士兼商学士であった。山田先生が予科に所属し、根岸先生が専門部に所属していた。根岸先生はいささか酒ぐせが悪い上に大正デモクラシーの余波を受けてか、銀座で警官を殴って一晩泊められたという人物である。晩年にいたるまで変らなかつたそのアナキストぶりは論文や反訳の中にいかなく發揮され、その奇抜な着想や論法は私たちの興味の的であった。モンテスキュー『ペルシャ人の手紙』の訳などは十返舎一九ばりの名訳である。だが先生の最高の御仕事は『法の精神』の完訳であろう。これは先生の命取りとなるほどの労作であり、日本の翻訳史上に残る訳業である。また上海ギルド研究の權威根岸佶教授を父上とする先生はフランスのフリーメイソン研究にもつよい関心をもっていたようである。再三私事にわたって恐縮だが、「高橋、お前なんか大きな顔をするようになったら、承知しねえぞ」とよく私を叱った先生が今頃まで生きておられたら、と私は半分ほっとしながら思い起こすのである。